



Title	「社会的アイデンティティ」と「間人」との出会い
Author(s)	柿本, 敏克; 安藤, 香織; 濱口, 恵俊
Citation	対人社会心理学研究. 2001, 1, p. 201-207
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8852
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「社会的アイデンティティ」と「間人」の出会い

柿本敏克 (群馬大学社会情報学部)
安藤香織 (奈良女子大学生生活環境学部)
濱口恵俊 (滋賀県立大学)

2001年2月4日におこなわれたケント大学心理学部教授ドミニク・エイブラムズ博士と滋賀県立大学人間文化学部教授濱口恵俊博士との会談の様を、この2名を含む参加者4人の紹介に引き続き採録した。濱口博士の提唱する「間人」概念の背景となる人間関係要因自体が、関連する調査データの結果にどのようにかわるかについて議論がなされ、その検証のための研究計画が提起された。またこれに関連して、比較文化的観点からいくつかの考察がおこなわれた。

キーワード：社会的アイデンティティ、間人、集団主義、反応バイアス、比較文化的考察

はじめに

滋賀県立大学教授濱口恵俊博士(前大阪大学人間科学部教授)と日本を訪問中の英国ケント大学教授ドミニク・エイブラムズ(Dominic Abrams)博士との画期的会談は、2001年2月4日の午後4時半から京都の「からすま京都ホテル」1階ティーラウンジ「レインツリー」にて始められた。ちょっと雨宿りをしながらゆったりくつろげるようにとの意図からつけられたものらしいこの店の名称は、形式張らない気楽で自由な対談をという参加者すべての願いを象徴するようであった。ここに同席したのは上記の2人を引き合わせた張本人である群馬大学助教授柿本敏克博士とその強力な助っ人である奈良女子大学講師安藤香織女史であった。

その当初の意図どおり、引き合わせと自己紹介に引き続き始まった会話はティーラウンジで注文するお茶のメニューに触発された「正しい英国風紅茶のいれ方」であり、まことに和やかで幸先のよいものであった。多少の事実確認の質問をはさみながらエイブラムズ教授の語ったそのいれ方とは、「先コップにティーバッグをいれておき、まだ沸騰しているあつあつのお湯をポットに注ぎ入れる。かたやティーカップにはミルクと紅茶が1対9になるようにミルクをいれておき、お茶がでたところでそれをカップのミルクの上に注ぎ入れる」というものであった。紅茶を毎朝家族のためにいれているというエイブラムズ教授の自信と信念にあふれた見解の開陳であった。もちろんわれわれ日本人3人は日本人らしく和やかな雰囲気を保つため、ティーカップに入れるのはミルクが先か紅茶が先かという論争が英国で戦わされているらしいことには触れないでおいたのであった。それぞれが紅茶に関しては一家言あり、柿本・安藤両氏に至ってはそれぞれの家庭で紅茶系主任の大役を果たしてさえいたのであるが。

ここで登場する人物をもう一度簡単に紹介しておこう。まず濱口氏であるが、いわずと知れた「間人」概念の提唱者であり(濱口1982など)、「日本らしさ」の本質が、日本人が文化的にもつ人間関係である「間柄」や自己概念「自分」といった独特のものにあることをかねてより主張してきた日本研究の第一人者である。現在の文化心理学の興隆のひとつの源流ということもできるだろう。次にエイブラムズ教授であるが、英国プリストル大学のヘンリ・タジフェル(Henri Tajfel)らによって創始された、個人行動から集団間関係系までを包括的に扱う理論的視野をもつ社会的アイデンティティ研究の現在のリーダーのひとりである。注意と行動統制の観点をこの分野に導入した功績があるほか(Abrams, 1985など)、最近規範からの逸脱者に対する人の判断・評価を新たな視点から精力的に分析している(Abrams et al., 2000)。学術誌'Group Processes and Intergroup Relations'の創刊者兼編者である。脇役として同席した柿本氏は大阪大学で修士研究を、またケント大学で博

士研究をした際にこれら2人からそれぞれ指導を受け、両者のアイデアの連続性に常に関心を抱きつつ今日に至っている。「間人」概念を個人特性として尺度化し(柿本, 1995 など)、社会的アイデンティティの研究手法を使って日英両国での研究を行ってきた。また安藤氏はエイブラムズ教授の指導の下でケント大学にて修士研究をおこない、日本と英国における組織内行動の文化比較研究のほか(Abrams, Ando, & Hinkle, 1998)、シミュレーション・ゲームの手法を用いた多くの集団行動研究を精力的におこなってきている。以上、主役、脇役ともに役者が揃った感があり何が始まるのか、展開が期待されるところである。

さて、話をティーラウンジでの会話に戻そう。先ほどの紅茶の話題およびそれぞれの英国での経緯の交換の後、まず最初に口火を切ったのは濱口氏であった。

濱口 エイブラムズ先生、ここに昨年カナダのトロントであった国際会議での講演のための原稿(Hamaguchi, 2000)と、1995-1999年に当時の科学技術庁からの受託研究としておこなった、25の国と地域で約8000人を対象とした調査の報告書があります(濱口, 1999)。進呈いたしますのでどうぞご覧下さい。調査報告書の中に、日本人の対人関係・人間観を測定するための個人主義24 間人主義24 計48個の質問項目に対する回答を調査対象者の国別に掲載していますが、例えば図1のダイアグラムにありますように、間人主義項目の回答を見ると、英国人回答者の方が何故か日本人回答者よりも関係性重視の考え方をするようです。

エイブラムズ ほー、そうですか。例えばどんな項目があるのですか。
(Figure 1 を用いて例えば項目番号 23、39 などをお互い確認しあう)

濱口 この傾向は英国人回答者に限らず、ヨーロッパの多くの国で一般にみられる傾向のようです。これは一体何故だと考えられますか。お考えを聞かせてもらえますか。

エイブラムズ 大変興味深い結果ですね。一つには反応バイアスということが考えられますね。

柿本 英国人たちは回答するとき、より一層どんな回答が相応しいかを考えて答えたというような社会的望ましさのことですか。

濱口 調査の目的は明らかにせず、またどの項目が個人主義、間人主義であるかを知らせずに回答してもらっているため、そういう可能性は低いと思います。

エイブラムズ いや社会的望ましさということよりももっと興味深いのは、例えば英国人が人との関係を問う質問項目をみて答えるときに誰を思い浮かべるかということです。英国人はもしかしたら日本人よりも多くの所属集団に属していて、またいろいろな社会的場面に遭遇しているため、いろいろな場面を容易に思い浮かべやすい。それで例えば「(23) 困ったときにもきつとだれかが助けてくれるものだ」という意見に対して、ある時に叔父さんから助けられたときのことを思い出して「うん、そうだな。確かに誰かが助けてくれるものだ。」と判断し、また別の「(39) 喜びだけでなく悲しみも分かち合えるのが、仲間との理想的な関係である。」という意見に対して、親しい友人たちとの関係を思い浮かべながら「うん、確かにその通りだな。」と賛成するということが起こる可能性があります。

これに対して日本人はどちらかという質問への回答時に思い浮かべる人が決まっていて、ごく身近な人だけを想定して回答するのもかも知れない。それは日本人のつぎあいにありがちな比較的限られた数の人との人間関係のあり方が反映されるからかも知れない。この場合には結果的に、日本人が賛成する質問項目の数が少なくなるということが起こる可能性があります。

濱口 面白い見方ですね。

柿本 理論的な意味でも日本文化における人間関係のあり方と結びつけた仮説になっていて、興味深いので

すね。

Figure1 貼り込み

エイブラムズ この仮説はそれほどたいそうな研究計画でなくても検証することができますよ。3つの条件を設定し、最初の条件ではごく普通の教示のもとにこの質問紙に回答してもらいます。2つ目の条件では回答前に「できるだけ多くの人を思い浮かべて回答して下さい」と教示する。3つ目の条件では回答前に「ごく身近な人を思い浮かべて回答して下さい」と教示する。この3つの条件での調査を日本と英国の両方でおこなうのです。そうすればこの調査報告書の結果のパターンが、日本人と、英国人をはじめとする西洋人の回答時に想定する「人」の違いからくるのかどうかを確かめることができます。各条件 50 人ずつの回答者で日英両国から 150 人ずつ合計 300 人からの回答を集めればよいでしょう。

柿本 なるほど簡単なデザインで先ほどの仮説は検証できますね。日英双方で実際に調査してみると面白いですね。ところでこの仮説で思い出したのは、アッシュの同調性の実験を日本で追試したところ日本人の方が同調率が低くなったという結果です。エイブラムズ教授の仮説はその時の結果の解釈に似ています。つまり同調実験の実験状況では、被験者にとって他の被験者は赤の他人ばかりだから、日本人の同調性の根拠になる特定集団の諸成員との関係からなる行動パターンが現れないというものです。

安藤 その話には続きがあって、「*Social psychology across cultures*」というサセックス大学の Smith 教授らの著書にそれが載っています (Smith and Bond, 1999)。つまりお互い親しい人同士を被験者として選んだ場合には、知らない者どうして実験を行った場合よりも日本人の被験者で一層、同調率が高くなったというものです。

柿本 しかし考えてみると同調性は集団主義との関係でよく語られますね。そうすると間人主義との関わりは弱いのではないのでしょうか。¹⁾

エイブラムズ いえ、私たちの立場からいえば、同調性は集団内の個々人との関係性から成り立ちます。ですからこれらの同調実験の結果は私の先ほどの仮説を補強する材料になると思います。日本と西洋では質問紙の回答時に誰を想定して回答するかが違って、それはそれぞれでの人間関係のあり方と関わっているという仮説です。

柿本 もうひとつ別の話なのですが、この濱口先生の調査結果は、京都大学の北山忍氏の文化心理学的観点からの日米行動差に関する議論 (北山, 1994; 北山忍・唐澤, 1995 など) を否定する東京大学の高野陽太郎氏らの主張 (高野・櫻坂, 1997 など) と一部重なりますね。つまり日本人がより集団主義的だという主張を支持する研究の数は実は少なく、むしろ逆の結果を示すものが多い、またその少数の支持例も方法論的に問題があるというものです。

安藤 この研究は最初日本語で『心理学研究』と『認知科学』に発表されましたが、その後英文でも "*Asian Journal of Social Psychology*" に掲載されています。以前高野氏とあるワークショップで同席したことがあるので覚えています。Asian Journal は英語なのでエイブラムズ先生もご覧いただけます。後ほど細かい文献情報をお教えします。

エイブラムズ 様々な興味深い研究が日本でなされているみたいですね。英語圏ではあまり知られていないのが残念です。何とか翻訳することでもっと知られるべきだと思います。

安藤 最初に日本語で出版した場合、同じ研究をそのまま英語に翻訳して雑誌に投稿するというのは難しいのではないのでしょうか。

エイブラムズ いくつかの研究をまとめてレビューのようにするなど、何か方法があるかも知れません。考えてみましょう。

安藤 ところで濱口先生、これらの質問項目は日本語と英語で同じ意味にとられているのでしょうか。同じ項目でも、文化によって微妙に意味が異なることはあると思いますが。

濱口 文化間の差ということかというと、一般に同調性や集団という言葉は英語圏では否定的な意味をもつことが多いですが日本語ではそうではない。同じ内容を研究しているようで、実は異なることを追究しているのかも知れない。なかなかこういったことを文化間で相対化して比較するのは難しいですね。それぞれの文化の中で概念自体が異なる意味あいをもっているのですから。

エイブラムズ 全くそこが難しいところですね。「社会的アイデンティティ」という概念が同じ英語圏であっても北米に導入されたときには「個人主義」的な解釈をほどこされて内容が少し変容してしまっているようなのですが、これもその例の一つでしょう。

話は変わりますが、濱口先生は社会学の背景をおもちだとうかがっています。そこでお尋ねするのですが、日本の社会学研究に海外のそれと違う特殊な議論はあるのですか。

濱口 ウェスタン・オリジンのものが多いので困ります。

柿本 濱口先生、農村社会学というのは日本に独特なものではないですか？

濱口 家族や地域研究ではユニークなものがあります。

安藤 そもそも社会学と社会心理学とが具体的にどのように違うのかという疑問を私は常々感じています。社会心理学は社会学とそもそも違うものなのかという質問をよく学生から受けるものですから。社会心理学については知っていても、社会学についてはよく知らないので、うまく説明できないんですよ。

柿本 これは私の個人的な意見ですが、社会学者は社会をあらゆるレベルからそれ自体、全体としてとらえようとすると思います。その分析には人間関係、役割関係、価値体系、経済・政治、その他非常に多くの観点を含むと思います。これに対して社会心理学者が社会を分析するときには1つないし2つといった少数のレベルに注目する傾向があると思います。

エイブラムズ まさにその通りです。心理学ではある特定の要因に焦点をあててその影響を検討するといった、原因を究明する方に傾いていると思います。そしてそれに加えて英国では社会学者はポストモダンの議論に傾きがちで、実証主義から離れていく傾向にあると思います。

柿本 そうですか。日本ではむしろ社会学でも現実的には実証主義が重視されてきていると思います。社会学者も社会調査・統計分析ができないと今は大学に就職できないと聞いていますので。

エイブラムズ 英国でも政府の研究補助金のみに関していえば、今後は実証研究にしか補助金を与えないという決定がなされたみたいです。

濱口 実証主義といえば、私は文化比較をおこなう際にも実証資料にもとづく議論が大事だと考えていて、その立場を私自身は心理人類学 (psychological anthropology) と呼んで自分自身の足場としています。

エイブラムズ そういう考え方は私も非常に重要なことだと思います。ところで実証資料の話が出たところで先ほどの調査研究に戻りますが、その調査で英国内のウェールズ・スコットランドとイングランドとの間の差はなかったですか。ウェールズやスコットランドには社会主義の伝統があって、そこでは人びとは連帯や団結、公共性により価値を置いているようですから。

濱口 今回の調査にはウェールズ・スコットランド・イングランドの比較をするだけの十分な資料がありません。

エイブラムズ 中国・韓国と日本の間の差はなかったですか。

濱口 中国・韓国と日本の間には目立った差は見られませんでした。

エイブラムズ 興味深いですね。

柿本 えー、口をさしはさんで申し訳ありません。話はまだまだ面白いところなのですが、予定していた時間もだいぶ過ぎてしまいましたので、そろそろこの討議も終わりにしたいと思います。大変有意義なお話をどうも有難うございました。

以上のように、興味深いいくつかのテーマを巡っておこなわれたティーラウンジでの討議も、そういった会合の常で、時間制限のためやむなく終わりを迎えたのである。しかしその後、参加者4人は濱口教授の招待で四条大橋東側の和風ハンバーグレストラン「ミヤタ」に移動し、夕食を取りながらの議論はさらに続いたのであった。最初、形式張らずくつろいだ社交的な席として設けられたはずのティーラウンジでの会話も、結果的にはかなり学術的な緊張感のある議論に展開してしまった。またこれはまったく偶然にも、エイブラムズ教授の日本招聘費用の出所である科学研究費補助金の研究テーマ「『社会的アイデンティティ』と『間人』の相関に関する日英比較」(研究代表者: 柿本敏克)の目的にまさに合致した展開でもあったのである。

なお当然のことながら以上の会話はすべて参加者の間の共通言語である英語を用いておこなわれており、ここではその様子をできるだけ自然な日本語に訳して転録した。また討議の自然さを損なわないよう会話は録音されなかったため、すべて筆者たちのメモと記憶に基づいたものである点を付記しておく。

文献リスト

- Abrams, D. (1985) Focus of attention in minimal intergroup discrimination. *British Journal of Social Psychology*, 24, 65-74.
- Abrams, D., Marques, J.M., Bown, N., and Henson, M. (2000) Pro-norm and anti-norm deviance within and between groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 906-912.
- Abrams, D., Ando, K., and Hinkle, S. (1998) Psychological attachment to the group: Cross-cultural differences in organizational identifications and subjective norms as predictors of workers' turnover intentions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1027-1039.
- Hamaguchi, E. (2000) What are Japanese Values? Reexamining stereotyped perceptions of Japanese culture. Paper presented at Access Japan 2000, Tronto, Canada.
- 濱口恵俊 (1982) 日本人の人間モデルと「間柄」 大阪大学人間科学部紀要, 8, 207-240.
- 濱口恵俊 (1999) 関係集約型人間による社会編成原理の研究 人間主義・個人主義の国際比較調査(その二) 受託研究報告書(科学技術振興調整費 総合研究「人間の社会的諸活動の解明・支援に関する基盤的研究」、第三分科会「人間社会における共創原理の解明と設計の研究」における「場所的社会的編成原理に関する研究」) 滋賀県立大学人間文化学部
- 柿本敏克 (1995) 内集団バイアスに影響を及ぼす個人差要因 社会心理学研究, 11, 94-104.
- 北山忍 (1994) 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山忍・唐澤真弓 (1995) 自己:文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- Smith, P.B. and Bond, M.H. (1999) *Social Psychology Across Cultures* (Second edition), Boston: Allyn and Bacon.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997) “日本人の集団主義”とアメリカの個人主義”: 通訳の再検討 心理学研究, 68, 312-327.

註

1) 集団主義と人間主義はともに文化比較の文脈で語られることが多いが、前者は集団価値を個人のそれと対比して相対的に重視するところに特徴があり、後者は集団を個人と対比する二元論的枠組によるのではなく、個々人に内面化された互いの関係性を重視するところに特徴がある、と筆者達は考える。

**A historic encounter between the West and the East
- A theoretical intersection of the “social identity” and the “contextualism” -**

Toshikatsu KAKIMOTO (*Faculty of Social and Information Studies, Gunma University*)

Kaori ANDO (*Faculty of Human Life and Environment , Nara Women's University*)

Eshun HAMAGUCHI (*School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture*)

The article excerpted the progress of the discussion that took place on February 4, 2001, between Professor Dominic Abrams, Ph.D. (Department of Psychology, University of Kent at Canterbury) , and Professor Eshun Hamaguchi, Ph.D. (School of Human Cultures, University of Shiga Prefecture) . It was preceded by brief descriptions of four participants including the two. The discussion involved the possibilities of response biases in related survey results, which might have been caused by background human relations factors in connection with the concept of “contextualism”. A research programme to examine the possibilities was proposed. Related cross-cultural considerations were further put forward.

Keyword : social identity, contextual, collectivism, response biases, cross-cultural considerations